

活動報告 移情閣まつり

■ 移情閣まつり & 交流会 2019 を終えて

10月13日、孫文記念館にて開催した「移情閣まつり&交流会 2019」は、129名の参加を得て、盛会裡に終えることができました。当日は来賓として孫文記念館愛新館長、川鍋事務局長、舞子公園管理事務所岩本所長のご臨席を賜り、また、神戸市長久元喜造様よりメッセージを頂戴しました。まつりは中国文化と音楽を楽しもうをテーマに、コーラス指導の張文乃先生が、作詞作曲された移情閣友の会 35周年応援歌「みんなが集う移情閣」を初披露。愛新翼館長に「中国宰相の言葉」、小学校講師梁佳恵さんに「日本語教室の子どもたち」と題し講演いただき、そのほか、二胡、ウクレレ、トロンボーン、フルス、オカリナ、ギターなどの演奏、詩吟、漢詩朗唱等などを楽しんでいただきました。関係機関、役員、協力員、参加者のみなさま、本当にありがとうございました。(後藤みなみ)



公開講座① 中国名宰相の言葉と逸話

孫文記念館館長 愛新 翼

私達が日常生活において、使っている語句の中で、中国の古典から来るものは結構多い。それらの故事・諺の出典は中国ですが、今では我々の生活の中の一部になっており、上手く消化されています。

ところで、我々が使っている言葉をそれぞれの出典にまで遡ってみるのも面白いと思います。今回孫文記念館友の会の移情閣まつりにおいて何か為になる話をしてほしいと依頼されましたので、「中国宰相の言葉と逸話」という題目で話をしてみました。

春秋時代、斉国の宰相管仲は、人間は生活を支える財産が豊かになってはじめて、礼儀作法をわきまえ、衣食の心配がない生活になってはじめて身を修め、名誉と恥辱をわきまえるようになっていった。所謂(衣食足りて礼節を知る。)**「衣食足知礼節」**である。

管仲はまた、「百年の計は人を樹るが如し。」と言い、人材を育成することは容易ではなく、百年かかると言ったそうです。それは教育の成果はすぐには現れず、百年経って始めて分かるという意味。明治維新は教育重視の考え、「百年樹人」を貫いた点、現在の日本の繁栄の基礎を築いたと言っても過言ではない。

また、春秋時代「臥薪嘗胆」で有名な呉越の戦いで、呉を破った功労者越の宰相范蠡は嫉妬深い越王の性格見抜き、将来越王はきつと、有能な臣下を何等かの理由で粛清するものと考え、越を去ろうとした。彼はまた友人、種に早く去った方が身のためと種に手紙を出す。その時の文句は(狡兔死して、走狗烹られ、飛鳥尽きて、良弓蔵められ、敵国破れて、謀臣亡ぶ)、「狡兔死、走狗烹、飛鳥盡、良弓蔵、敵国破、謀臣亡」と、言葉で越を去るよ



う種に促したが、種は、意に返さず越に居残った。案の定、その後、「種に謀反の疑いあり」と讒言する者が現われ、王に疑われた。はたして勾踐から剣を賜り、自殺に追い込まれた。

三国時代、赤壁の戦いにおいて、蜀の宰相諸葛孔明は呉の周瑜將軍に曹操軍を破る最適方法として、火攻めを提案した。すなわち、「欲破曹公、宜用火攻、万事俱備、只欠東風」という十六文字であった。

「曹公を破らんと欲せば、宜しく火攻めを用うべし。万事俱に備われど、ただ東風を欠く。」火攻めには東の風が絶対必要だと周瑜將軍に言った。しかし、今最も重要な条件(東風)が欠けているという意味。その後中国では、絶対条件が欠けている場合の諺として、広く使われている。

南宋の宰相文天祥は元に捕らわれ、投降するよう説得されたが、彼は頑として拒否し(人生古より誰か死無からん)。「人生自古誰無死、(丹心を留取して汗青を照らさん)、「留取丹心照汗青」と詠い、寧ろ死を望んだ。彼の義に生き、忠に生きるその心意気は、その後吉田松陰はじめ、日本の幕末志士達に大きく影響した。

フビライは文天祥に国の重要地位に迎えると一年かけて説得したが、最後まで頭を縦に振らなかった。フビライは文天祥のことを「真の男子なり」と評したという。